令和5年度
「学びチャレンジリーディングスクール事業」実践報告会

実践報告会要項

研究主題

音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成
～ICTを活用した授業づくり～

令和5年12月1日（金）
於：北九州市立日明小学校

〔報告会時程〕

13:30　13:55　14:40 15:00　15:30 15:35　15:50　16:50 17:00

受付	公開授業	準備	協議会	準備	研究演奏 開会行事	講演会	閉会行事

１　公開授業（13：55～14：40）

２

学　級	授業者	題　材　名
４年１組	竹永 亮太	日本の音楽でつながろう

授

業協議会（15：00～15：30　体育館）

３　研究演奏・開会行事（15：35～15：45）

４　講演会（15：50～16：50）

演題「音楽科の授業づくりと学習評価について
～これからの音楽科授業について考える～」

講師 佐賀市立金立小学校　教授　副島 和久　様

５　閉会行事・諸連絡（16：50～17：00）

研究主題
音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成～ＩＣＴを活用した授業づくり～

Ⅰ　主題設定の理由

⑴ 社会背景及び音楽科学習指導要領より

今，令和の教育改革によって，社会や学校教育は大きな転換期を迎えようとしている。生活や社会にデジタル技術が自然に溶け込んでいくＤＸ（デジタルトランスフォーメーション）が急速に進行し，ＩＣＴを使いこなすことは，これからの時代を生き抜くためになくてはならないスキルであり，社会にでる前に必ず身に付けておくべきものと位置づけられている。社会の大きな変化の中で，人工知能（ＡＩ）の飛躍的な進化はその最たるものといえる。人工知能が人間の脳の働きを越える境界点，いわゆるシンギュラリティが，いつやってくるのかという議論も熱を帯びてきている。シンギュラリティに到達すれば，今現在人間が果たしている役割をＡＩが担うようになり，それにより多くの雇用機会が失われるとも言われている。しかし，その一方で，文章から必要なことを読み取ったり，目的のよさ・正しさ・美しさを判断したりできるのは人間の最も大きな強みであるということを，再認識させるきっかけになっているのも事実である。いずれにせよ，ＡＩを始めとする技術革新やグローバリゼーションが日々進んでいる世の中においては，時代の潮流を読み取ることは大変難しいことだといえる。

新型コロナウイルス感染症により，全国の学校が臨時休校を余儀なくされたことを受け，「１人１台端末」実現時期が前倒しになり，緊急時の在宅オンライン学習に備えた通信環境整備などを含む緊急経済対策が成立した。「教育現場におけるＩＣＴ化」が，「ＧＩＧＡスクール構想」のもと，急速に進められており，タブレット端末を中心とするＩＣＴの有効活用が求められている。

今回の指導要領改訂では，このような，未来の予測が困難な時代において必要な資質・能力は，これまで学校教育が長年その育成を目指してきた「生きる力」であるということが，改めて言及されている。そして今回の改訂では，「生きる力」がさらに具現化され，育成を目指す資質能力が，ア「何を理解しているか，何ができるか（生きて働く「知識・技能」），イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」，ウ「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の３つ柱に整理された。各教科等の目標についても，この３つの柱に基づき「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の３つの柱に再整理された。

上記のことを踏まえて，本研究では，これまでに引き続き「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善に取り組み，３つの資質・能力を育成するための手立てとして，ＩＣＴを活用した実践の有効性について考察していくこととする。

⑵ 目指す子ども像及び児童の実態より

本校の本年度の学校教育目標及び目指す子ども像は以下の通りである。

【学校教育目標】
確かな学力と豊かな人間性を兼ね備えた自立心旺盛な児童の育成
（めざす子ども像）
自立し、思いやりの心をもつ子ども
新たな価値創造に挑戦する子ども
日明・小倉・北九州に誇りをもつ子ども

本校の児童は４７１名で，特別支援学級を含め１９学級である。毎週の「今月の歌」の時間や，日々の音楽科の学習を通して，音楽を愛好する風土は根付いている。「音楽委員会」の高学年の児童は，担当する学級の児童に姿勢や発声のアドバイスをするなど，技能面に対する意識も高まってきている。歌うことや楽器を演奏することを愛好する児童が多い一方で，「この曲をこのように表現したいから，こんな工夫をしてみたい」といった思いをもって，音楽の学習に臨んでいる児童はまだ少ない。また，技能的な高まりや表現の工夫が見られても，それがその題材の中だけで完結してしまい，せっかく学んだことがそれ以降の題材に生かされていないことも多い。つまり，なんとなくできたことが，音楽的な視点で認知され整理されていないので，再現性が低く学びに深まりが見られていない。

学習面では，家庭学習が定着していないことが課題である。宿題以外の学習に取り組む児童が少なく，自ら進んで学習に取り組む姿勢が身に付いていない。その結果，復習や予習をして，基本的な学力が身に付いている児童とそうでない児童との学力差が大きくなり，そのことが授業の中で個にあった指導をすることを難しくしている。グループ学習の取り組み方が成熟していないことも課題である。特に自分の考えがもてないことや，思いや考えはあるがどう伝えればよいか分からず，友達の意見をただ聞くだけで終始してしまうグループ活動になることが，一番の問題だと考える。

普段の生活においては，自分の思いを上手く伝えられなかったり，相手の思いを汲み取ることができなかったりすることが原因で，友達とトラブルになるケースが多くみられる。さらに全国学力調査の結果から，地域の行事や活動に対する関心の低さがうかがえる。様々な教科等の学習を通して，地域との繋がりを認識させ社会を構成する一員であることを意識させることが求められている。

このような児童を，目指す子ども像に近づけるためには，今改訂で整理された，資質・能力の３つの柱を確実に育成させていくことが不可欠である。自分に何ができるかということを認知することは，どんなことにも自信をもって立ち向かう力になるだろう。自分にできることをどう活用して問題を解決すべきかということを繰り返し考える力も，未知の状況に対応するには大切な力である。このように，本研究を通し，その３つの資質・能力が高まれば，本校が目指す子ども像に近づくはずである。また，３つの資質・能力を育成する上で，「主体的・対話的で深い学び」をその手立てとして用いれば，よりその定着は確かなものになるはずである。そして，その学びのプロセスそのものが，様々な困難に立ち向かっていく際の，大切な礎となるはずである。よって本研究に取り組むことは，本校が目指す子ども像を実現するにあたり，大変意義深いものであると考える。

「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」の実現に向けた授業改善を進めることは不可欠である。主体的に学ぶ学習を仕組むことで，自ら学び判断し，行動する力や，考える力が育つ。そして，対話的な学習場面を仕組むことで，一人では思いつかないような考え方に気づき，多様な価値を認め合い，みんなでやり遂げる経験や，仲間と助け合う経験を得ることができ，所属感や自己肯定感を高めることができる。本研究に取り組むことは，本校が目指す子ども像を実現するにあたり，大変意義深いものであると考える。

⑶　これまでの研究の視点より

本校では平成１７年度より音楽科教育を研究主題とし平成１９年度からは「学校大好きオンリーワン実践報告校」として，平成２９年度より令和元年までは「コアスクール事業実践報告校」として毎年公開授業を行ってきた。令和２年度からは「学びチャレンジリーディングスクール事業」として再出発をし，本市の音楽科学習指導の中核を担う学校として責務を果たすこととなった。

平成２９年度からの３年間は学習指導要領改訂の方向性を見据え，「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指して研究を推進してきた。この間，様々な手立てを用いてその　実践を行ってきた。しかし，その手立てが資質・能力を育成する手段として有効であったかという検証が為されてこなかった。そこで，本校では令和２年度から３年間をかけ，「音楽のよさを感じ取り，音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成に向けた授業づくり」をテーマに掲げ，より資質・能力を育成するための授業改善策を行った。

これまでの研究の成果や課題を踏まえ，今必要とされる力を育成するための指導方法を研究することは，１０年以上にわたり音楽科の学習指導を研究し続けた本校の大きな使命であると考える。他の教科にはない音楽の魅力を十分に生かしながら，どの学校でも実践することができる音楽科指導の一提案になれば幸いである。

本校の研究主題の変遷

○　平成１７年度　九州音楽教育研究大会を開催
大会主題　「心に響く音楽教育」
小学校部会テーマ　「感じ合い，響き合い，感動し合う心」
本校研究主題　「子どもが音楽のよさを感じ取り，豊かに表現する音楽科学習」
～一人一人の思いや願いをもとに，表現の喜びを味わう学習の工夫～

○　平成１８年度
「子どもが音楽のよさを感じ取り，豊かに表現する音楽科学習」
～一人一人の思いや願いを表現に結び，楽しく活動する学習の工夫～

○　平成１９年度（学校大好きオンリーワン事業一年次）
「子どもが音楽のよさを感じ取り，豊かに表現する音楽科学習」
～一人一人の思いや願いを表現に結び，よさを聴き合って楽しく活動する学習の工夫～

○　平成２０～２１年度（学校大好きオンリーワン事業二，三年次）
「子どもが音楽のよさを感じ取り，豊かに聴き合う音楽科学習」
～一人一人の思いや願いを生かし，はぐくむ鑑賞指導の工夫～

○　平成２２～２４年度（学校大好きオンリーワン事業四，五，六年次）
「子どもが音楽のよさを感じ取り，豊かに感じ取る音楽科学習」
～共通事項を支えとし，表現と鑑賞の活動の関連を図った学習展開の工夫～

○　平成２６年度（学校大好きオンリーワン事業八年次）
「我が国の伝統音楽を中心に，表現と鑑賞の関連を図った指導方法の工夫改善」

○　平成２７～２８年度（学校大好きオンリーワン事業九，十年次）
「多様な音楽のよさを感じ取り，心と心をつなぐ音楽科学習指導」

○　平成２９～令和元年度（コアスクール事業一、二、三年次）
「音楽のよさを感じ取り、主体的に表現や鑑賞に取り組む子どもの育成」
～「主体的・対話的な深い学び」を実現するための音楽科学習指導～

○　令和２～４年度（学びチャレンジリーディングスクール事業一，二，三年次）
「音楽のよさを感じ取り、音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成に向けた授業づくり」

○　令和５～７年度（学びチャレンジリーディングスクール事業一，二，三年次）
「音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成～ＩＣＴを活用した授業づくり～」

２　主題の意味するもの

⑴　「音や音楽と豊かに関わる資質・能力の育成」について

新しい小学校音楽科が目指すべき方向を一言で言い表すとすれば，「学習の主体者である子どもが，感性を働かせながら，学校での学習内容と生活や社会の音との関わりを実感できるようにすること」ということになる。新学習指導要領では，音楽科の目標として「表現及び鑑賞の活動を通して，音楽的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成することを目指す（一部省略）。」と示されている。「音楽的な見方・考え方」とは，子どもが音楽科の学習と生活や社会の中の音楽とを関連付けるという考え方であり，音楽を学ぶ意義の中核をなすものである。これは，「見方・考え方」を働かせた学習を積み重ねることで，広がったり深まったりして，その後の人生においても生きて働くものになる。また，

育成を目指す資質・能力として，①「知識及び技能」の習得…「何を理解しているか，何ができるか」②「思考力，判断力，表現力等」の育成…「理解していること・できることをどう使うか」③「学びに向かう力，人間性等」の涵養…「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか」の３つを具体的に挙げている。つまり本研究は，新学習指導要領に示されている目標を確実に達成するべく，そのために有効な手立てを探っていこうとするものである。そして，これまでに引き続き「主体的・対話的で深い学び」の視点で手立てを講じ，その有効性について考察を重ねていくものとする。また以下に，「主体的・対話的で深い学び」について，本校の捉え方を記す。

（ｉ）「主体的な学び」について

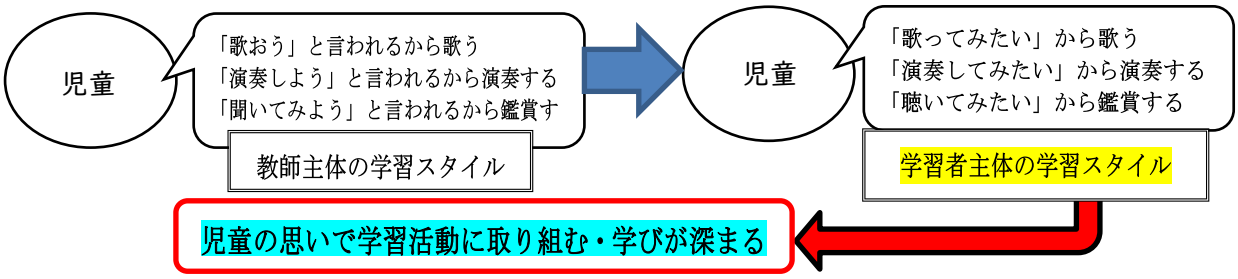
次の４つのような具体的な姿が見られた時に「主体的な学び」が実現していると考える。

①学ぶことに興味や関心をもっている

②見通しをもっている

③粘り強く取り組んでいる

④自分の学びを振り返って，次の学びにつなげている



（ⅱ）「対話的な学び」について

「対話的な学び」とは，子ども同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手がかりに考えること等を通じ，自己の考えを広げ深めることである。また，対話の種類は，自分の意見を伝え合うものや，グループで議論を重ね１つの作品を作り上げるものなど，幾つかの種類に分類される。児童に付けたい力に応じて，どの対話を行うかを明確にしたい。

対話をする中で，自分の考えを相手に受け入れてもらえる喜びを覚えることにより，より主体的に学ぼうとする姿が生まれてくることが期待できる。「対話的な学び」は「主体的な学び」にもつながることが期待される。

（ⅲ）「深い学び」について

「深い学び」の鍵となるのが，「見方・考え方」を働かせることである。新学習指導要領において，音楽科における「音楽的な見方・考え方」とは，「①音楽に対する感性を働かせ，②音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え，③自己のイメージや感情，生活や文化などと関連付けること」と示されている。

①については，音楽にふれたときの素直な反応や，湧き出てくる感情のことである。つまり，音楽科の学習における学習基盤であり，この感性を働かせることが学びのスタートであるともいえる。②については，音楽を構成しているリズムや音色などの音楽的要素を思考・判断のよりどころとしながら，音楽を意味あるものとして捉えることである。③については，その学んできた音や音楽の存在に，価値を与えることであり，その音楽がどうやって生まれ

たか，どうして今この音楽を歌うのかといったことを自己のイメージや感情，生活や文化と結びつけて考えることである。

よって深い学びを実現するためには，児童が感性をしっかり働かせる手立てを講じることは当然のこととして，さらには音楽を構成する要素に気付かせることや思いや意図をもって演奏をすることができるような手立てを構築することが必要だと考える。

⑵　「ＩＣＴを活用して」について

他教科を含め，ＩＣＴの活用方法としてよく挙げられるのは，「伝え合う・知識を得る・記録する・考える」の四つである。これに加えて，音楽活動がベースにある音楽科において不可欠なのが「表現する」という使い方である。実際に，音楽科の学習でＩＣＴを使うメリットとして，以下の場面が考えられる。

・楽譜の知識や演奏技術がなくても音楽を表現できる。
・音楽文化を知るだけでなく，自分たちで音楽をつくることができる。
・一人一人のペースで学ぶことができ，学んだことをクラス内で容易に共有できる。
・学びの軌跡の一つ一つを残すことができる。

タブレットの活用は，演奏技能の差の解消や演奏の補助に役立つため，音楽科に苦手意識をもつ児童（Ｃ児）への有効な手立てとなると考えられる。また，生の楽器や演奏では物理的に実現できないもの（例えば細かい３２分音符や３オクターブの跳躍など）も表現することができるなど，児童の考えやアイデアを表現することが可能となり，より深い学びを実現できると考える。

３　本研究で目指す子ども像

○　音楽活動を心から愛好する，自ら親しもうとする姿（学びに向かう力，人間性等）
○　繰り返し表現のしかたを工夫し，よりよい音や音楽を目指す姿（思考力，判断力，表現力等，技能）
○　音や音楽を，それを形作っている要素の観点で捉え，理解しようとする姿（知識）
○　自分の苦手なことも，ＩＣＴを活用することで実現しようとする姿（学びに向かう力）

音楽科の学習でこれらの姿を実現し，本校で行われる音楽科以外での教育活動の成果と合わせることで，本校の目指す子ども像の育成を果たすことができると考える。

４　研究仮説

ＩＣＴを活用し，主体的な学び・対話的な学び・深い学びの視点で授業改善をすれば、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成することができるだろう。

⑴　授業改善の視点１・・・主体的な学び

○　導入で意欲を高めるための手立て

・　音や音楽（教材）との出会わせ方の工夫（本時とは限らない）

・　児童の思いをもとにしためあての設定（ねらい・評価規準・まとめとの整合性）

・　常時活動の工夫

○　見通しをもてるようにするための手立て

・　めあてを達成した姿（ゴールイメージ）の確認

・　題材や本時の流れ（プロセスイメージ）を話し合う場面の設定と可視化

・　既習事項の掲示

○　粘り強く活動に取り組むことができるようにするための手立て

・　Ｃ評価の児童に対する働きかけ

○　学びを自覚できるようにするための手立て

・　教師の声かけ・問いかけにより視点を明確にした振り返り

⑵　授業改善の視点２・・・対話的な学び

○　学びのある話し合いにするための手立て

・　話し合う視点の焦点化

・　考えを共有しやすくする工夫（ＩＣＴ機器や拡大楽譜，ホワイトボード等の活用）

○　グループ活動に集中できるようにするための手立て

・　能力を考慮したグループ編成

・　活動する場の工夫

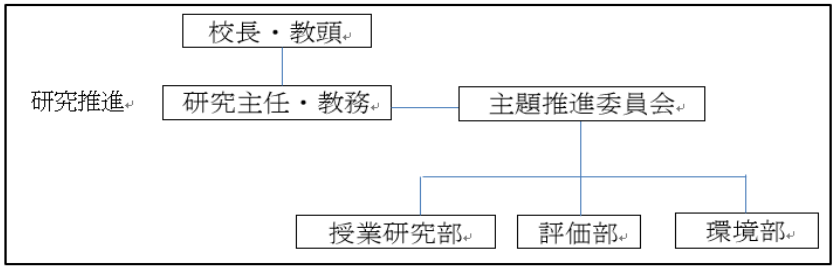
⑶　授業改善の視点３・・・深い学び

深い学びの鍵となるのは「音楽的な見方・考え方」を働かせることである。「音楽に対する感性を働かせ，音や音楽を，音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え，自己のイメージや感情，生活や文化などと関連付けること」をもとに，学びが深まっている状態を具体的に想定し，ねらいを明確にした上で授業をする。

5　研究の組織と計画

(1)　研究推進計画

①　研究組織



②　研究推進委員会

校長・教頭・教務

学年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特支
名前	小西	中村	小黒	竹永	山本	伊藤	宮崎

(2)　学びチャレンジリーディングスクール事業実践報告会等に向けての計画・推進部会割り等

①　学びチャレンジリーディングスクール事業実践報告会

授業学年・授業者及び授業学級

学びチャレンジリーディングスクール 実践学年	４年１組		
学びチャレンジリーディングスクール 授業者	竹永　亮太		
主題Ａ研	２年１組	３年１組	５年２組
主題Ｂ研	１年１組	６年３組	
主題Ｃ研	Ａ研以外の学級		

②　部会割り

	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特支	７年
授業研究部	小西	中村	小黒	竹永	加瀬	茨木	宮崎	山口
評価部 環境部	神明	満元	馬越 横内	比田勝	山本 野口	伊藤 齋藤	田津 仲西	林田